



目次

生産現場情報	： 基盤整備を契機に特産の「白神ねぎ」に果敢に挑む農業法人 ～株式会社あさかわファーム～	P 1 ～ 4
営農支援情報	： 幼穂形成期に向けた圃場管理	P 5 ～ 9
ご 紹 介	： 秋田県産青果物をPRする初代「あきたフレッシュ大使」誕生	P10
	「HAPPY TOGETHER ONE」プロジェクト第2弾	P11
	大豆反収向上に向けた排水対策現地講習会を開催しました	P12
	京急あきたフェア2024「あきたecoらいす応援プロジェクト」	P13
	秋田県立大学 スマート農業指導士講座開講	P14
お 知 ら せ	： 田んぼの生きものの調査実施中！	P15

基盤整備を契機に特産の「白神ねぎ」に果敢に挑む農業法人 ～株式会社あさかわファーム～

1. 法人設立の背景等

あさかわファームが位置する秋田県能代市は県北部にあり、秋田三大河川の米代川が流れる、山に囲まれた盆地にあります。この地域で生産される主な農産物は、米、大豆、みょうがのほか、「白神ねぎ」が有名です。

あさかわファームは「この地域の農業を守り、存続させたい」という強い信念のもと、浅内・河戸川地区の基盤整備を契機に、地域の担い手として設立されました。あさかわファームという名前は浅内・河戸川地区（あさない・かわとがわ）の両地区の頭文字が由来で、この地域への思いが込められています。法人化以前は水稻中心の農業を行っていましたが、基盤整備後はこの地域を盛り上げるべく、「白神ねぎ」に力を入れ、現在、ねぎの栽培面積は約8haまでに拡大しました。

法人名：あさかわファーム

設 立：令和2年1月

代表者：伊藤 隆一（代表取締役）

所在地：秋田県能代市河戸川字新屋布80番地

構 成：9名（役員2、社員2、技能実習生2、
パートタイマー3）



伊藤代表取締役



ねぎ調整施設



事務所兼技能実習生宿泊場所

2. 経営の概要・特色

経営の概要（令和6年度）

■経営面積：約16ha

・水稲：約8ha

（品種）あきたこまち

・ねぎ：約8ha 「白神ねぎ」として出荷

（品種）夏扇パワー、夏扇4号、大河の轟き、森の奏で、陽春の宴、羽緑一本太、項羽一本太、元晴晩生

経営の特色

■栽培体系：水稲

限られたビニールハウスを有効活用するために高密度播種苗に取り組んで3年目となります。

昨年は坪当たり50株植えを実施したところ移植時期に天候不順の影響を受け、収量の低下が見られたため、今年は苗を調整し70株植えに取り組んでいます。また、側条施肥としてプラスチック被覆肥料を20%削減した基肥一発型肥料「基肥まくモンX」を施用し、作業効率化およびコストの低減に取り組んでいます。その他、朝夕の水管理を徹底するなど丁寧な栽培管理に努めています。

■栽培体系：ねぎ

水稲単作では従業員の年間雇用が確保できないことや地域のブランドである「白神ねぎ」を盛り上げたいという思いから、周年栽培ができるよう春ねぎ～囲いねぎまでの体系による栽培を行っています。

そのため、ねぎの品種は8種類を揃えるなど、品種特性をいかした栽培に取り組んでいます。また、圃場を集約することで作業効率化も図っています。その他、通常2粒播きのところを1.5粒にし、太く良質なねぎを作ることを第一に取り組んでいます。

栽培管理作業風景



乗用管理機（マメトラ） ※日除けは自作



調製作業風景



根・葉切り～皮むき～選別～ヌル取り～結束～箱詰め

■販売先

収穫した水稲・ねぎは、ＪＡに出荷しています。



3. 労働力確保へ向けた取り組み（「労働力確保支援事業」の活用）

あさかわファームは、全農とＪＴＢが連携協定をしている「労働力確保支援事業」を県内で初めて活用しました。この取り組みは労働力不足解消を目的に令和３年度より開始し、ＪＴＢと全農が農作業を受託し、生産者への労働力を提供する事業です。

あさかわファームの伊藤代表は「これから『白神ねぎ』の出荷が本格化する中で、人手の確保に悩まずに圃場管理や収穫作業に集中できるのはありがたい」と話していました。



本会のＨＰでも紹介させていただきました！

4. 今後に向けて

あさかわファームには、「地域の農業を守り、存続させたい」という強い信念があります。

伊藤代表は、「地域を盛り上げるため、今後もねぎをメインとして、働きやすい職場を目指したい」と話していました。

また、将来はねぎの面積を10haまで拡大することを見据えており、実現のためには「労働力の確保とそれを補うためのねぎの収量・品質の向上が必須」と話していました。

労働力確保の面では上述の労働力確保支援事業を始め、様々な対策を打っているものの、人口減少により、思うような結果にならないこともあり、その中でドローンでの散布などスマート農業を導入し、作業の効率化を図っていききたいと話していました。

収量・品質の向上の面では、連作障害の回避のためブロックローテーションを進めていきたいとのことでした。現在は近隣の農家に声をかけながら地域として取り組んでいます。

保有設備・施設

- ・田植え機：1台
- ・トラクター：60PS・1台、42PS・1台
- ・ねぎ管理機：3台（うちマメトラ乗用管理機1台）
- ・ねぎ収穫機（ソフィ）：3台
- ・ベストロボ：2台
- ・自動結束機：1台
- ・ブームスプレイヤー：1台
- ・ドローン（T10）：1台（病虫害防除用）
- ・施設：ビニールハウス6棟、ねぎ調整ライン2ライン



営農支援部 営農支援課 ☎018-880-1011



－ 幼穂形成期に向けた圃場管理－

茎数は平年より多いが**地域・圃場間差は大きく**、圃場ごとに適切な栽培管理を！

1. 令和6年産米の田植え作業進捗情報

4月は天候に恵まれ、播種作業は中央・県南地区で**平年より2日早く**始まったものの、終期は全県で平年並みとなりました。耕起作業は全県で**平年より3日早く**始まり、終期も**2日早く**終了しました。

5月は晴れる日が多かったものの、周期的に大雨となったところもありました。期間を通して気温は高く、日照時間も多い傾向にあったものの、田植えは始期・終期ともに平年並みとなりました。

表1 県内の農作業進捗状況（県 水田総合利用課より提供）

		始期			盛期			終期		
		2024	平年	平年差	2024	平年	平年差	2024	平年	平年差
播種作業	県北	4/12	4/12	0	4/18	4/19	-1	4/26	4/26	0
	中央	4/8	4/10	-2	4/18	4/18	0	4/27	4/27	0
	県南	4/18	4/20	-2	4/24	4/25	-1	4/29	4/30	-1
	全県	4/11	4/12	-1	4/21	4/22	-1	4/29	4/30	-1
耕起作業	県北	4/20	4/22	-2	4/29	5/2	-3	5/7	5/10	-3
	中央	4/14	4/16	-2	4/25	4/27	-2	5/7	5/8	-1
	県南	4/27	4/30	-3	5/4	5/6	-2	5/12	5/14	-2
	全県	4/16	4/19	-3	5/1	5/2	-1	5/10	5/12	-2
田植え作業	県北	5/14	5/14	0	5/21	5/21	0	5/29	5/28	-1
	中央	5/9	5/10	-1	5/18	5/19	-1	5/30	5/29	-1
	県南	5/16	5/17	-1	5/24	5/24	0	6/2	5/31	+2
	全県	5/12	5/12	0	5/22	5/22	0	5/31	5/30	-1

2. 稲の生育状況

田植え後の生育は、全県で草丈と葉数は平年並みですが、茎数は124本/m²（**平年比84%**）と平年より**かなり少**なりました（P6表2）。全県で前年比103%と昨年度より多い傾向にあるものの、いずれの地区も6/10時点の理想茎数よりもかなり少ない生育となっています（P6図1）。

茎数不足の要因は以下の3点が考えられます。

- ① **栽植密度が低下傾向**であること。（P6図1）
- ② 移植後の**強風**による葉先の黄化や**植代枯れ**。
- ③ 5月下旬～6月上旬にかけ、**最高気温の低い**期間があり、水温や地温の上昇が緩慢だった。（P6図2）
⇒**分けつの発生が緩慢**だったことが想定された。

表2 県内の生育状況（6/10、各地域振興局調査）

品種	地区	草丈			茎数			葉数		
		2024	前年比	平年比	2024	前年比	平年比	2024	前年比	平年比
		(cm)	(%)	(%)	本/㎡	(%)	(%)	(葉)		
あきたこまち	県北	25.4	97	95	144	105	84	6.4	0.3	0.1
	中央	25.6	97	100	138	92	89	6.5	0.1	0.1
	県南	25.1	105	103	102	107	82	6.0	0.5	0.2
	全県	25.3	100	100	124	103	84	6.3	0.4	0.2
(参考) ひとめぼれ	中央	27.4	99	98	207	78	87	6.5	-0.2	-0.1

※平年値：H26～R5年までの過去10年平均

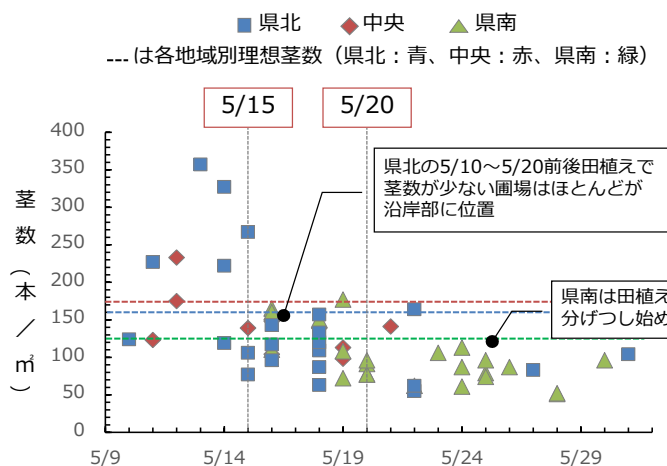


図1 田植え日と茎数の関係
(県 水田総合利用課データより作成)

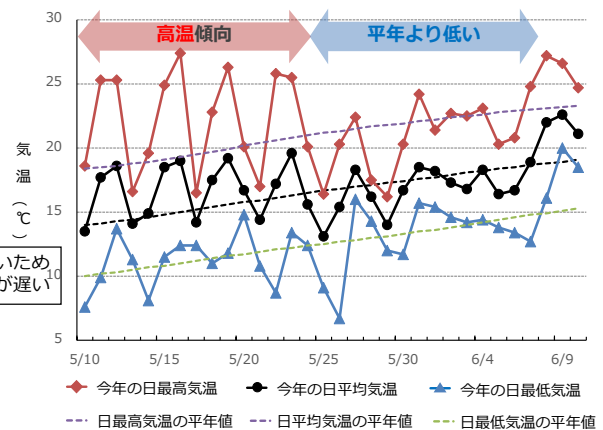


図2 5月中旬～6月上旬の気温の推移
(秋田市)

6/25時点の生育は、全県で草丈は**39.8cm**（平年比**108%**）、茎数は**443本/㎡**（同**109%**）、**葉数は9.4葉**（平年差**+0.7葉**）、葉緑素計値**44.0**（平年比**100%**）となっており、**6/10調査で平年より少なかった茎数は平年より多くなりました**（表3）。

表3 県内の生育状況（6/25、各地域振興局調査）

品種	地区	草丈			茎数			葉数			葉緑素計値		
		2024	前年比	平年比	2024	前年比	平年比	2024	前年比	平年比	2024	前年比	平年比
		(cm)	(%)	(%)	本/㎡	(%)	(%)	(葉)			(%)	(%)	(%)
あきたこまち	県北	39.7	94	105	458	106	101	9.5	0.3	0.6	43.3	99	98
	中央	42.1	96	110	498	113	125	9.6	0.4	0.7	43.5	100	99
	県南	38.9	101	110	408	118	110	9.2	0.5	0.7	44.7	101	102
	全県	39.8	97	108	443	112	109	9.4	0.4	0.7	44.0	100	100
(参考) ひとめぼれ	中央	43.2	95.36	111	545	101	106	9.4	0.1	0.4	39.6	99	96

※平年値：H26～R5年までの過去10年平均

6月2半旬以降が**高温多照**で経過したことや、**適切な水管理（浅水管理）の徹底**により、理想茎数を確保できたと考えられます。しかし、県北や県南の一部圃場では、6/25時点での理想茎数が確保できていない圃場もあり、**地域間差・圃場間差が大きい**状況となっています（図3）。

前述したとおり、高温多照で経過したことから、生育は順調な圃場が多いものの、全県的に葉齢が進んでおり、稲の生育ステージは早まっています。圃場間差が大きいことから、**生育状況に応じた中干し**を実施しましょう。

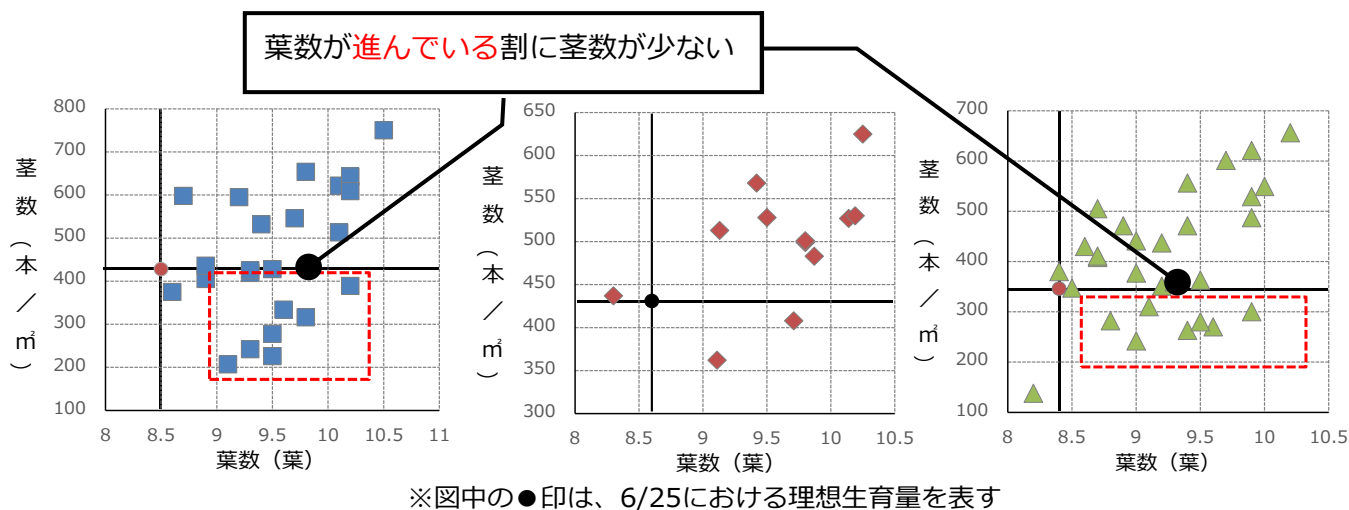


図3 6/25現在の葉数と茎数の関係（左から県北、中央、県南地区）

3. これからの気象の見通しと圃場管理

仙台管区気象台は、東北地方が6月23日頃に梅雨入りしたと発表しました。平年より8日遅く、昨年より14日遅い梅雨入りです。向こう1ヶ月の気温は高くなる見込みで、7月上旬までの最高・最低気温ともに平年より高くなる見込みです。

(1) 水管理（あきたこまちの場合）

- 6月下旬～7月上旬：無効分げつの抑制のため、落水→**中干し**

※ただし、十分な茎数が確保できていない場合は、**少し長めに浅水管理**を実施し、**強めの中干し**は行わない。

中干しの効果を高めるために

排水不良田や有機物等が多く、異常還元が起きやすい圃場では、**溝切り**をオススメします。

- 7月中旬～8月上旬（**幼穂形成期～出穂前**）：**飽水管理**
- 8月中旬：**出穂初め**は間断かん水→**飽水管理** or 間断かん水
- 9月上旬（**成熟期**）：**落水管理**、ただし**出穂30日後頃**とする。

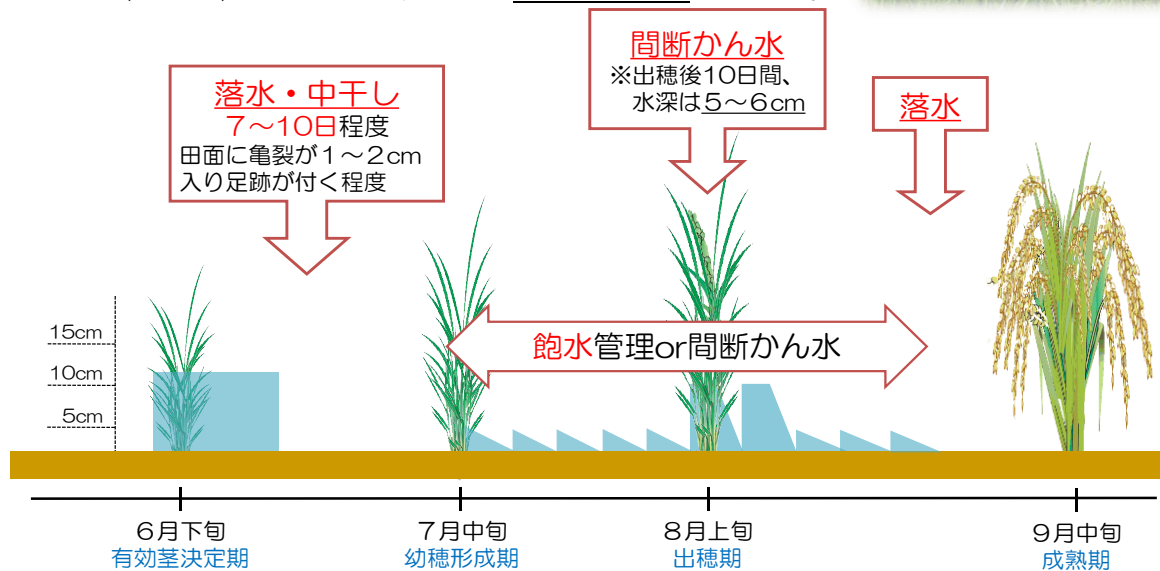


図4 6月下旬以降の水管理

(2) 斑点米カメムシ類対策

今年は春先の好天で斑点米カメムシ類の発生が早かったことに加え、高温で経過したこともあり、6月3半旬までの総誘殺数はアカスジカスミカメが**300頭（平年28.7頭）**、アカヒゲホソミドリカスミカメが**52頭（同37.8頭）**と平年よりも**かなり多くなっています**。（6/25発表、農作物病害虫発生予察情報第3号より）。斑点米カメムシ類の被害を防ぐには、適期に薬剤防除を行うだけでなく、水田内外の雑草管理も重要になります。

- ☐ 水田内にヒエ・ホタルイが残草している場合は、早めに追加防除を！
- ☐ 農道・畦畔等の草刈りは、適期に行いましょう！

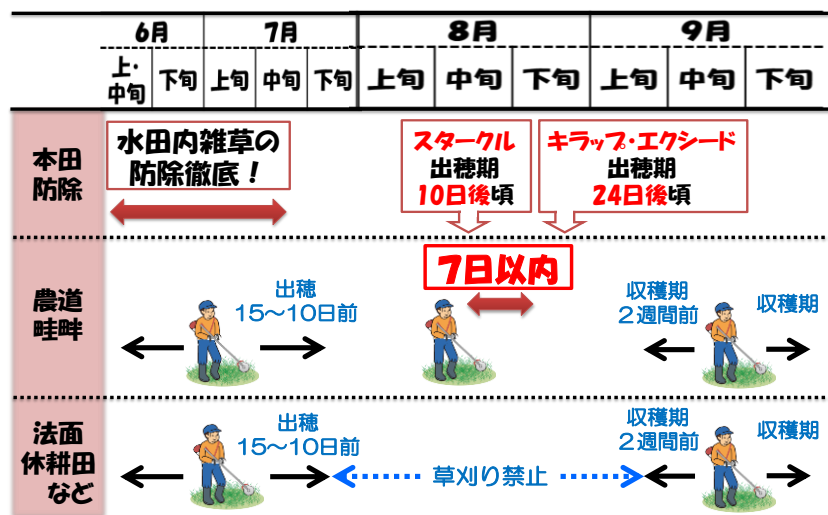
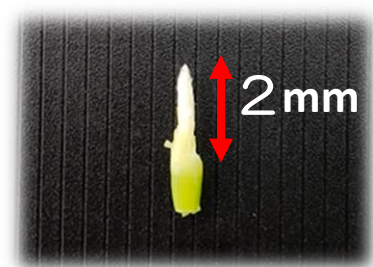


図5 カメムシ防除の時期と薬剤

(3) 生育診断に基づいた穂肥

幼穂形成期（右図参照、あきたこまちで例年7/15頃）、減数分裂期（葉耳間長±0cm、例年7/25頃）は、下記のような時期にあたります。



- ① 幼穂が伸長し、**籾数・千粒重**に影響を及ぼす**もみ殻の大きさが決定する時期**
- ② **倒伏**に影響を及ぼす**下位節間が伸長する時期**
- ③ 出穂後の登熟に影響を及ぼす**根域が拡大する時期**

穂肥の判断は、生育・栄養診断の結果に基づいて行いましょう。

6/25現在のあきたこまちの幼穂形成期の予測は表4のとおりとなっており、6/26以降の気温が平年並みに経過したとしても、幼穂形成期は**平年より早まる予測**となっています。圃場ごとに幼穂形成期を判断し、追肥時期を見極めましょう。

表4 あきたこまちの出穂予測日（秋田市）

田植え日	6月26日以降の想定気温経過 (平年の日平均気温に対する差)			平年差※ (日)		
	+2℃	±0℃	-2℃	+2℃	±0℃	-2℃
5/10	7/2	7/3	7/4	-13	-12	-11
5/15	7/5	7/6	7/8	-10	-9	-7
5/20	7/8	7/10	7/12	-7	-5	-3
5/25	7/11	7/13	7/15	-4	-2	0

※平年値を7/15とした場合の差

表 5 あきたこまちの理想生育量（幼穂形成期）

	草丈 (cm)			茎数 (本/m ²)			葉数 (葉)			葉緑素計値		
	上限	理想	下限	上限	理想	下限	上限	理想	下限	上限	理想	下限
県北	62	60	57	586	552	519	11.0	10.8	10.6	42	40	39
中央	63	61	58	559	515	471	10.9	10.7	10.5	44	42	40
県南	64	62	60	484	463	443	11.0	10.9	10.7	43	42	41

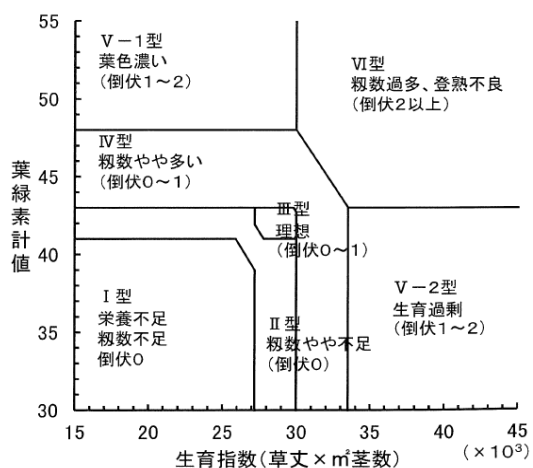
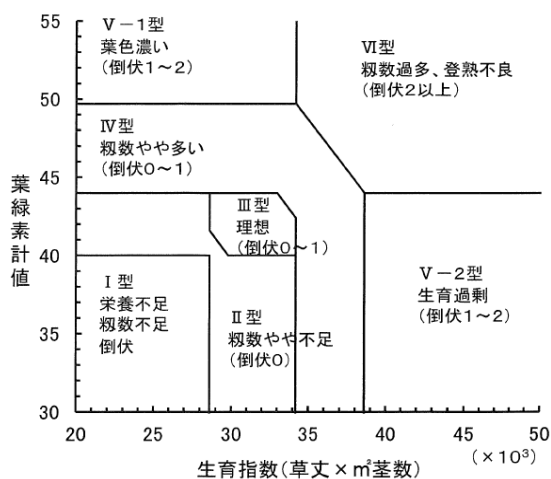
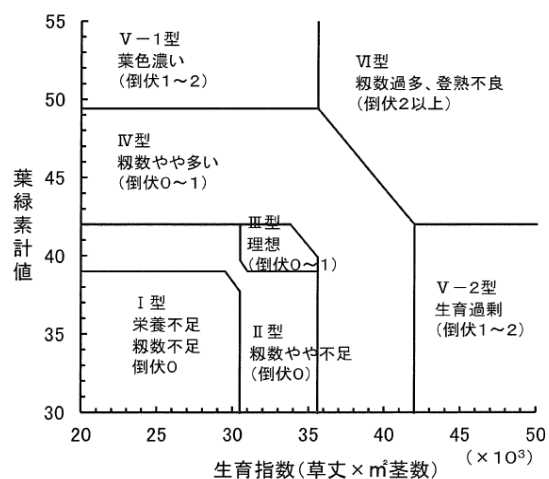


図 6 あきたこまちの幼穂形成期における栄養診断
(左上：県北、右上：中央、左下：県南)

表 6 栄養診断に基づいた追肥量
(あきたこまち)

生育型	窒素追肥量 (kg/10a)	
	幼穂形成期	減数分裂期
I 型	2kg	2kg
II 型	2kg	2kg
III 型	ムラ直し1kg	2kg
IV 型	なし	2kg
V-1 型	なし	ムラ直し1kg
V-2 型	なし	ムラ直し1kg
VI 型	なし	なし

※目標数量：570kg/10a



ご紹介

秋田県産青果物をPRする初代「あきたフレッシュ大使」誕生 ～「ミス・フレッシュ秋田」からバトンタッチ



秋田県産青果物をPRする「あきたフレッシュ大使」の3人が決定し、5月31日、秋田市で委嘱状交付式が行われました。

県やJ A・J A全農あきたなどで構成する「あきた園芸戦略対策協議会（事務局：J A全農あきた）」は今年度から幅広い層へPRすることを目的に応募資格の範囲を広げ、名称を「あきたフレッシュ大使」に変更しました。



委嘱状交付式では、同協議会の虻川和義会長が3人に委嘱状を手渡し、「生産者と歴代ミス・フレッシュ秋田の継続的な活動によって秋田ブランドが消費者から高く評価されるようになった。活動のバトンを受け取り、生産者の思いを心に刻んで笑顔で頑張ってもらいたい」と激励しました。

「あきたフレッシュ大使」は6月からの1年間、県内外で開催されるPRイベントやキャンペーンに参加し、県産青果物の魅力をお届けします。

「HAPPY TOGETHER ONE」プロジェクト第2弾 ～秋田ノーザンハピネッツ選手と「サキホコレ」田植え作業

秋田米「サキホコレ」の田植えが最盛期を迎える中、5月20日「HAPPY TOGETHER ONE」プロジェクト第2弾となる「サキホコレ」の田植え作業を、JAグループ「秋田米新品種サキホコレ研究会」の佐々木竜孝会長の田んぼで行いました！

JA全農あきたとバスケットボール男子Bリーグ1部秋田ノーザンハピネッツの小栗瑛哉選手と元田大陽選手がJA秋田おぼこ、大曲農業高等学校農業科学科の生徒9名とともに、田植えを実施しました。



小栗選手と元田選手は「いつも応援してくださる皆さんと田植えができていい機会となった。自分達が植えた苗を収穫できる日を楽しみにしている」と話してくれました。

「HAPPY TOGETHER ONE」プロジェクトは、JA全農あきたと秋田ノーザンハピネッツがJA秋田おぼこ、大曲農業高等学校とともに秋田米「サキホコレ」の農作業を行い、収穫したお米を秋田ノーザンハピネッツに贈呈することで一層の活躍を応援する企画です。また、「サキホコレ」をPRし、秋田米全体を盛り上げようという願いも込められています。今回田植えをおこなった「サキホコレ」は秋に収穫し、チームに贈呈されます。



大豆反収向上に向けた排水対策現地講習会を開催しました

J A全農あきたは5月21日、大仙市太田の大豆圃場でJ A秋田おぼこの担当者とJ A全農あきた職員26名を対象に「大豆反収向上に向けた排水対策現地講習会」を開催しました。

この講習会は、水田活用の直接支払交付金にかかる「5年水張ルール」に対応するため圃場のローテーションに取り組む生産者への対応強化として、転換1年目の大豆圃場における明渠施行や心土破碎での排水対策の実演を通じて、排水対策の徹底による大豆の収量向上をはかることを目的に行われました。



大豆は湿害に弱い作物であり、特に発芽から生育初期の湿害は、その後の生育や収量に著しい悪影響を及ぼします。そのため、排水対策を徹底することで収量向上につなげることができます。

クボタアグリサービス株式会社からは60馬力トラクタ、スガノ農機株式会社からは各作業機の概要の説明があり、溝堀り機とハーフソイラによる排水対策の実演が行われました。排水路の施工により、地表の停滞水を排除することができるほか、土層に亀裂をつくることができ、透水性と通気性が向上します。参加者からは、「排水対策の実施により、生育・収量にどう影響するのか注目したい」などの声がありました。



J A全農あきたでは、生産現場で課題とされる圃場の排水改善方法や品質、反収向上につながる実証課題に取り組み、農業経営体の所得向上を目指します。

京急あきたフェア2024「あきたecoらいす応援プロジェクト」 ～田植えを実施

今年で16周年を迎える「京急あきたフェア」のキックオフイベント「あきたecoらいす応援プロジェクト」の田植えを5月23日、大仙市のほ場で行いました。

「京急あきたフェア」の田植えは、京急グループ社員のみなさんがお米の生産過程を知り、また実際に農業体験をすることで、食の大切さや農業に対する理解を深め、日々の業務にいかしてもらおうと企画されたものです。



キックオフイベントには、京急グループ社員をはじめ、秋田県立大曲農業高校生、J A秋田おぼこ、ほ場をお借りしている北川目ファーム、本会職員など約50人が参加しました。はじめに、環境に配慮した「あきたecoらいす」などについて研修を行ったあと、素足で田んぼに入り、地元生産者やJ A職員の指導を受けながら、丁寧に手植えを行いました。秋には、同じほ場で京急グループ社員と大曲農業高校生と一緒に稲刈りを行います。



秋田県立大学 スマート農業指導士講座開講

秋田県立大学の社会人教育プログラム「スマート農業指導士育成プログラム」の開講式が5月31日、大潟村のホテルで行われました。

本講座は座学や演習を通じて、スマート農業に必要な知識や技術・技能を修得して、生産現場での実践・支援を目指します。



受講生の一人、J A全農あきた農業機械課の加賀職員は「スマート農業という広い分野については疎い部分がある。見て触って学びたい。」と意気込みを話しました。

講習会ではスマート農業の総論やロボット技術、AI・IoT、農業普及の分野を軸に、行政機関や県内大学、一般企業、農業関係者などが講師を務め、双方向・多方向による討論や企業などと連携した演習を行います。

期間は来年3月までとなっており、32科目を全て履修して最終課題を提出すると、スマート農業指導士の修了認定を受けられます。



J A全農あきたは、今後もスマート農業の普及や関連産業の振興を図りながら秋田県農業の持続的発展に貢献してまいります。

お知らせ

田んぼの生きものの調査実施中！

ＪＡ全農では、次世代を担う子どもたちへの食農教育の一環として、「田んぼの生きものの調査」を実施しています。

田んぼに入り、生きものと触れ合う中で、「食」「農」の大切さや、農業（水田）の持つ多面的機能や生物多様性との関わり、環境保全に果たす役割を「五感」で感じてもらう活動として取り組んでいます。



Za・あぐりふぉーむ
Zennoh-akita agriculture+reform



ＪＡ全農あきた営農情報誌 **Za・あぐりふぉーむ**
第53号 令和6年7月5日発行

編集・発行 ＪＡ全農あきた営農支援部営農支援課 〒011-0901秋田市寺内字大小路207の24 018-880-1011